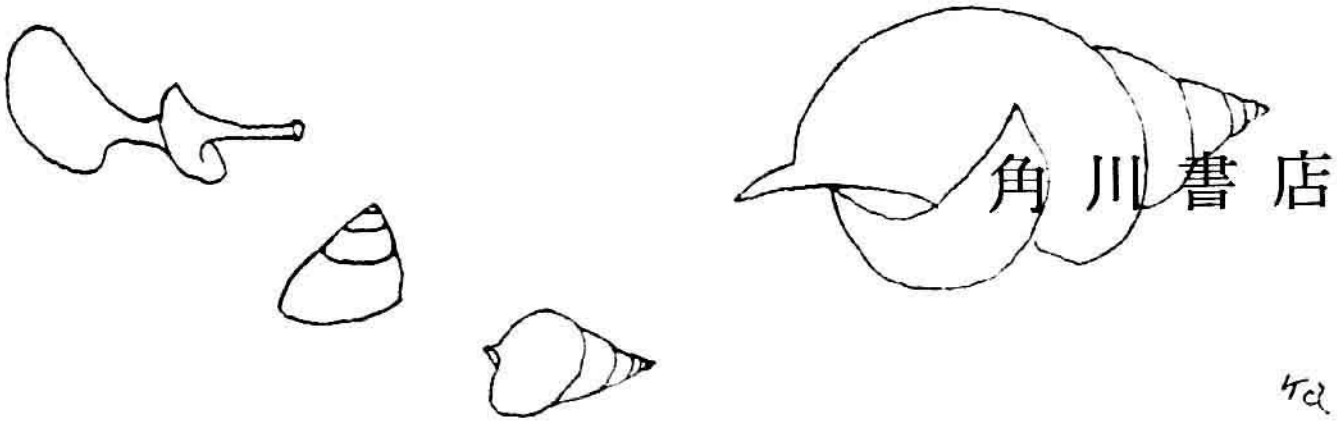
スター見本市

十返　肇

スター見本市

十返　肇



角川書店

スター見本市

昭和36年11月15日初版発行
定価 二百六拾円
著作者 十返肇
発行者 角川源義
印刷所 同興印刷株式会社
製本所 株式会社 宮田製本所
発行所 株式会社 角川書店
東京都千代田区富士見町二
振替 東京一九五二〇八番

© Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

スター見本市

第一話　不安なインタアビュウ　七
第二話　女が男に相談するとき　二九
第三話　姦通ダブル・ヘッダー　四五
第四話　華やかな孤独　六三
第五話　港街の文化人　七八
第六話　モデル廃業　九四
第七話　ある結婚の事情　一一〇
第八話　死んだエース　一二六

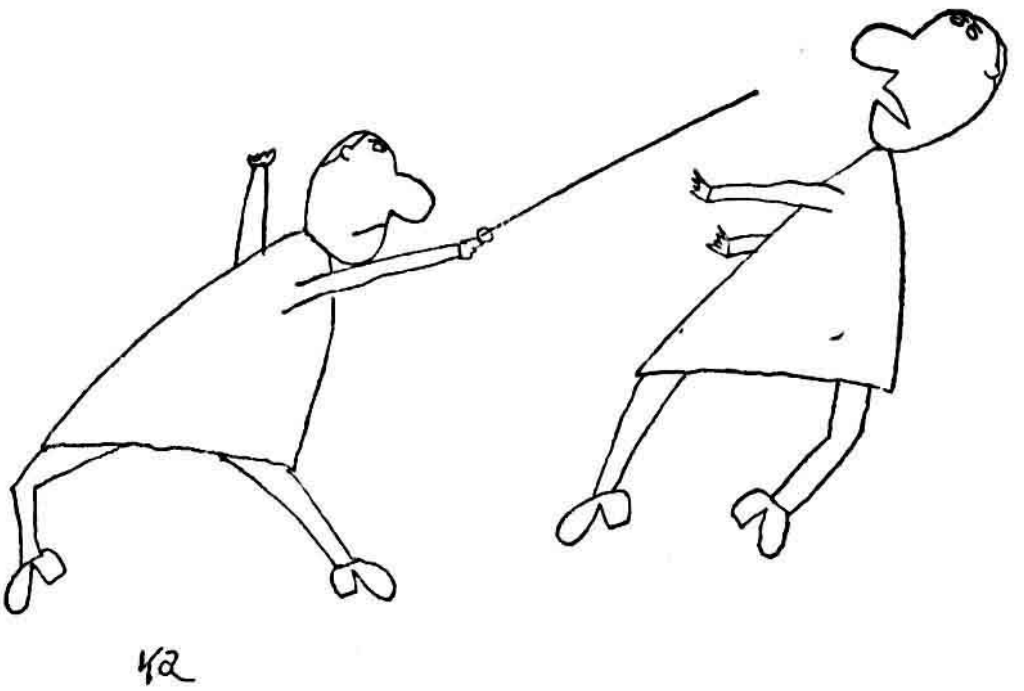
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第九話　迷探偵登場　一四三
番外　銀座狂騒曲　一五八
文壇浪人街　一六九
情事のサムライたち　一七一
文壇浪人街　一八〇
宇野千代・平林たい子・佐多稲子　一九一
女にかけては日本一　二二一
十返肇のプロフィール　十返千鶴子　二三五

装幀
カット

風間完

スター見本市



第一話　不安なインタアビュウ

一

「そ――そりゃあ本当かね？」

不覚にもうわずった声を出して、こう叫んだのは、いま売り出しの剣豪作家宮本小次郎であった。商売がら、紙の上では何十人、いや何百人も平気で斬り殺しているが、この男、実はきわめて小心で臆病なのである。

「ははア、してみると、やっぱり御存知なんで……」

相手の男は、落ちつきはらって、薄笑いを浮か

べている。その冷笑的な表情は、〝そうれみろ、隠しても駄目だゾ〟といっているようだ。
事ここに至っては、宮本小次郎のほうでも、〝もう隠しても駄目だナ〟と観念するほかはなかった。

その日、宮本小次郎は、午後一時ごろから、この丘の上にあるホテルの一室で、もの凄いスピードで小説を製造していた。
それは、まったく製造という感じで、一部の編集者たちのあいだでは、
「あいつは生れつきの小説製造業者だ」
といわれている彼は、一晩に五十枚は平気で書いた。なにしろ、毎月、六百枚ないしは八百枚を書きとばすタフな男である。
彼自身、自分が、こういう小説家になろうとは夢にも思ってはいなかった。
三年以前までの彼は、毎月三十枚から五十枚ぐらいしか書けなかった。それも剣豪小説などではなく、もっぱら、あの私小説という批評家に評判のわるい代物だった。もっとも、批評家には、いまの方がなお悪い。……
しかし、平凡な生活をしている、彼の私小説が、そんなに売れるわけはない。彼は完全にゆきづまってしまった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

そんなとき、ある中間小説の雑誌からたのまれて、おもいあまって書いたチャンバラ小説が意外な大好評をとった。

それは、丹下左膳にヒントを得たもので、時を戦国時代にかえ、大坂夏の陣に、片目片腕のニヒルな武将が大活躍をし、さんざん徳川方を困らすという、まことにデタラメなものだったのだが、どういうわけか、これが大当り。

早速、ほうぼうから注文がかかるようになった。それも、時代物という条件づきの注文ばかりで、彼はもう、私小説など書けないような状態に置かれてしまった。そのうち、比較的打ち込んで書いた作品が、大衆文芸では、もっとも権威のある直川賞を受け、以来、一流の流行作家となったのである。

――まったく、たった三年のあいだに変ったものだ。

と、彼自身も感慨無量である。

家は、阿佐ヶ谷の奥のほうから、渋谷の松濤という一等地を買い、デラックスなモダン邸宅を新築した。車も新車のキャデラックを買うし、軽井沢と大磯に、二つも別荘を建てた。近ごろは、ゴルフもやれば、文士劇でも重要な役割が廻ってくる。以前は、よれよれの背広ばかりであったのが、剣豪作家になってからは凝った和服も着るようになった。

またこれまでは、せいぜい、おでん屋か、新宿あたりの二流どころのバーで飲んでいたのが、

銀座でも一流のラスパールとか、おくめとかで、ジョニオーカーの黒を飲む身分とはなった。
そして、細君には内緒で、ひとりの女を高級アパートに置いている。……

二

その宮本小次郎が、いましも原稿用紙の上で、中山安兵衛を、伯父を助けに高田の馬場へ走らせている最中、フロントから電話がかかってきた。
『『大衆タイムス』の北倉という方が、ご面会したいそうです」
「『大衆タイムス』――」
と呟いて、彼は不審気な顔をした。
それは、お色気とバクロ記事専門の赤新聞だった。彼も、二、三度、若い編集者がもっているのを見たことがあるが、そんな新聞が、オレに何の用か、と思った。もちろん、彼に小説をたのめるようなガラの新聞ではない。
「忙しいからといって、ことわってくれ」
明日の午前十時までに、七十枚を書かなきゃならんのだ。そんな新聞につきあっていられるか。
彼は、ふたたび、安兵衛を走らせはじめた。
ところが、また、電話が鳴った。

「どうしても、お逢いしたいことがあるそうです。先生の名誉に関することで……とおっしゃっていますが」

――チェッ、おれの名誉だと？　なにをいやがる。またぞろ、なにか、つまらぬゴシップでも耳にはさんで……

と、思った途端、ハッとした。

〝まさか、さと代のことでは……〟

と、気にかかったからである。

さと代というのは、アパートに置いてある女である。彼女のことは、少数の仲間ぐらいしか知らぬ筈だ。しかし、どこかのバーででも聞きこんできて書こうというのではなかろうか。十返肇なんて、おしゃべりもいるからナ。と、彼は舌打ちした。だが、

「それは、困る」

小次郎はうめいた。

第一、細君にでも知れたら大変だ。賢女のほまれ高い、ヒステリーに知れたらコトである。

――よし、逢おう。一万円でもやればよかろう。

「じゃ、バーの方で待ってろといってくれたまえ」

そういって、電話を切った。

そして財布をタモトへ入れて、太い溜息を吐くと部屋を出ていった。

バーのほうへ来てみると、案外、感じのよい、二十七、八歳の色の白い青年が、スタンドにもたれかかっていた。

彼の前には、水を入れたコップしかない。

――ふン、おれの来るまで遠慮していたのだな、と思うと、なにかしら好感がもてた。

「ハイボールを、ふたつ」

と、まだ子供のように若いバアテンにたのむと、

「おれの名誉に関する――ッて、なんだい」

なるべく高飛車に出なければ、と意識して宮本小次郎は、相手の顔も見ずにいった。

「ハア……あの、ここでいっていいでしょうか」

相手は、あきらかにバアテンに気をつかっているようだ。

自分でもバアテンにきかれては、都合の悪いことになるかもしれないが、ここで、弱気になってはつけこまれると思ったので、

「ああ、構やしないさ。俯仰天地に恥じねえからな」

と強引にいった。

相手は、眼の前に置かれたハイボールを手にとって、ひとくち飲み、しばらく黙っていたが、やがて、口をきった。

「先生は、新宿の成子坂にある宝屋ホテルというのを御存知ですか」

――ハハア、あのことか。

小次郎は、さと代のことでないので一応安心した。

しかし、知っているといったものか、知らぬといったものか、しばらく考えずにはいられなかった。

この青年が宝屋ホテルのことで自分に逢いにきたとすれば、なにか摑んでいるに違いない。しかし、どの程度まで知っているのか判らなければ、うかつに答えられない。宮本小次郎は、相手の表情をうかがうように、その顔を凝視した。

相手は、ちょっと、眼をしばたたくようにした。そして、いった。

「宝屋ホテルが検挙されたんですよ。……昨夜……」

小次郎が、

「そ――そりゃあ本当かね？」

と、不覚にも、うわずった声を出したのは、その時であった。

三

二年ほど以前の秋である。

ちょうど、宮本小次郎が文学賞をとり、剣豪作家としてメキメキ頭角をあらわしつつある一夜、彼は、京王映画のプロデュサーの牧村と、文芸部の矢城と、銀座裏の料亭で会食した。

それは、小次郎の小説『風雲海賊城』の映画化に関する打ち合せの集りであった。その小説は、地方紙に連載したものだったが、非常な好評を浴びていたので、原作料も想像以上に高かった。それにプロデュサーの牧村のざっくばらんな人間性にも好意を感じたので、彼は機嫌がよかった。彼は、ニヒリストみたいなポーズをとっているが、案外にお人よしで、たいてい誰にでも好意を感ずるものである。

「じゃア、ひとつ、契約完了を祝福して、二次会とゆくか」

という牧村の言葉に、彼も賛成した。

やがて、よばれた車に三人で乗ったが、実は、どこへいくのか小次郎は知らなかった。

車は銀座を通り抜け、渋谷に向ったが、渋谷の商店街も通り抜け、三軒茶屋ちかくの暗い路地の入口でとまった。

——どこへいくのか、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com